

席の示し方一 円座黒解一

成文鏡下解

入発端・発式物語の用例

イエヒヘ光総氏、ソヤ覧じて、せで、
營兵部御官、もみはすみにわうだめして、
となくつばひもちひ、だいからうじやうのものども、
ナモくに箱のよたにとくられ、(若葉上 1115)

ギの殿上人はすみにわうだめして、
營兵部御官、もみはすみにわうだめして、
となくつばひもちひ、だいからうじやうのものども、
ナモくに箱のよたにとくられ、(若葉上 1115)

*上直部リタ霧・柏木

口ニの宮へ一系の言へに脚人のヅ特を御使にてたてま
ツリ給ふ。

口ニの宮へ一系の言へに脚人のヅ特を御使にてたてま
うちさりあれや君に心をとづけひきておれと思ふ

うづわしときく、うづわしときく、
うづわしときく、うづわしときく、

内度と菌の階層性・取扱いの場所

△秋草子の場合

イ「唐の大きさは、わざわざのほどで得る」(師走)

ロ大納言殿へ藤原伊周一は、そのくじう情けに、中

千は日暮にハ三段へ

△孟津川ノサメノサメノサメノサメノサメノサメノサメ

△一多天皇から定るへの御使に対するアモのやどり

リのてによりたる間に、しとわざり出でます。アモのやどり

殿は細きさんなれば、アモのやどり、陣につづり給ひ、
一歩で、一の段し

△特殊な使用例

イ天皇譯正良、先太上天皇(嵯峨)之第二子也、母

后曾頃、自引円座穀栗之、其向不知極、每一加果、

旦誦言卅三天、因誕天皇云(続日本後紀卷一)

口此夜夢、種讀政円座穀栗百枚、臥其上、是月仕内裏

一〇二〇
即祈願所見也(推記 寛弘七年三月十二日)

△特異な使用例

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

ハシラヒヤウモウシ、

八三、意慮・忌避など

△補・敷く・坐だす

イ元日早旦御装束、垂津廬南第一間、第十五間御簾、

以直印帳南北面御几帳、立於第十三四間、庭御座前

敷著円座一枚、馬陪膳女房座、其南又敷一枚、馬尚藥

座(江次第差)、供御栗、

ロ伴大納言善男は佐膳國郡司加従者也、主の郡司

が家へゆき、もひ、所に郡司さほめたる相人等

けむか、日ごろはさしもせぬに、とひがひに饗

せければ、へ宇治拾遺語、差一、

ハシラヒヤウモウシ、

ハ宵もやすすぬうと思ふに、告の首止うと
かげにあはてゆく見ゆるに、時々かやうの
二人の家に、三尺の几帳、大モヤが立ち定女(三=五倍)
木松の木立高き所の、東南の格子上、丁
すしげにす、て見ゆる母屋に、四尺の几帳立てれば、
て、左の前にわらうて置きて、四十ばかりの宿の
いと清けだる、墨深の衣・薄物の器皿五種
さううきて(三=五倍)
に、雪のいと高う(ふみえ)一セ六枚

＊黄子の端に円座を多く、一部今に座す。

二人の家に、三尺の几帳、大モヤが立ち定女(三=五倍)

木松の木立高き所の、東南の格子上、丁

すしげにす、て見ゆる母屋に、四尺の几帳立てれば、

て、左の前にわらうて置きて、四十ばかりの宿の

いと清けだる、墨深の衣・薄物の器皿五種

さううきて(三=五倍)
に、雪のいと高う(ふみえ)一セ六枚

